

## 佐賀県玄海域におけるイカ籠の形状と漁業形態

野田 進治・古賀 秀昭\*

The Shape of Cuttlefish Cage and Its Fishing Actual Condition  
in the Genkai Coast, Saga Prefecture

Shinji NODA and Hideaki KOGA

本県玄海地区では、ケンサキイカを始めとするイカ類は重要な漁業資源となっている。このうち、コウイカ類については、近年は100トン以下と減少傾向にあるが、1991年には190トン、約1億4千万円の水揚げがあるなど重要なイカ類の一つとなっている。コウイカ類の中でもコウイカはイカ籠、刺網、釣り、小型底曳網、定置網などにより主に2～5月に漁獲されているが、漁期前半はイカ籠が主となっている。

このイカ籠漁業について、実態調査を行ったので、以下に報告する。

## 材料及び方法

1996～97年に、唐津市漁協神集島支所2経営体、浜崎漁協、小友漁協、呼子町漁協、鎮西町漁協申浦支所、仮屋漁協、肥前漁協、大浦浜漁協各々1経営体、計9経営体に対し、イカ籠の形状や操業実態等について聞き取り調査を行った。

## 結果及び考察

## 1. 操業実態

近年、イカ籠漁業を営む経営体は減少傾向を示し、現在、本県玄海海域では40経営体に満たない程度となっている。その要因として、コウイカの漁獲量の減少<sup>1)</sup>、価格の低迷に加え、操業、漁具の準備にも時間や労力を要すること等があげられる。

## 1) 操業時期

イカ籠漁業の操業期間は、漁業許可方針あるいは漁業

権行使規則により制限されている。

浜玉町の区域では操業期間は2月25日から6月30日までで、このうち4月30日までが沖合域で主にコウイカを、5月1日以降が沿岸域でカミナリイカを目的とするなど、漁獲対象、操業区域が変わる。

唐津市高島の区域では操業期間は3月1日から7月31日までで、同様に4月30日までが東よりの海域、5月1日以降が西よりの海域となっている。

その他の区域では、2月1日から4月30日までの操業期間となっている。

## 2) 操業区域

操業区域は、漁業許可方針あるいは漁業権行使規則により制限されている。

操業場所の水深は10～40m程度で、瀬や藻場は避け、砂地の漁場で操業している。

コウイカは産卵期になると沖合から沿岸に移動してくるため、これに伴い操業場所も移動している。コウイカの移動経路は毎年一定でないため、操業場所の決め方によって漁獲量が大きく左右されることになり、漁業者の経験と勘が重要な要素となっている。

## 3) 操業方法

漁具は幹網約30m毎に10～20個のイカ籠を取り付けたものを1組として、潮流等により流されないように幹網の両端に錨を付け、さらに、両端には旗竿を付けた浮きにより旗が海面から1m以上出るように設置している。1経営体当たりの籠数は、操業区域により異なるが、50、100、120個以内等に制限されている。

幹網にイカ籠を繋ぐ枝網は2m前後で、イカ籠に繋ぐ場所はイカ籠の入口側又はその反対側の2通りみられた。

\* 現 佐賀県生産振興部水産課

一般に入口側を繫ぐことが多く、反対側を繫ぐ理由は、入口がロープに邪魔されないため、イカは潮の流れに向かって遊泳することから、入口を潮の流れと逆行させるため等の理由であった。

イカ籠を揚げる頻度は、当初はイカ籠の産卵基質にコウイカが産卵するまで、4～7日程度放置するが、その後は時化等を除き1～3日毎に揚籠するのが一般的である。

なお、時化等によりイカ籠が破損、紛失した場合は、その都度イカ籠の交換、補充を行っている。

## 2. イカ籠の形状

### 1) イカ籠の形状

形状は種々報告されている<sup>2)</sup>が、当海域では円筒型と半球型の2つに大別される。(写真)一般に円筒型が主であるが、唐津市漁協の神集島支所や仮屋漁協、大浦浜漁協では半球型が用いられている。半球型は、神集島支所が円筒型を独自に改良したもので、これが仮屋漁協等に普及したと思われる。なお、今回の聞き取り調査では、本県玄海地区にイカ籠を最初に導入したのは浜崎漁協か神集島支所と推定されたが、導入元は特定できなかった。

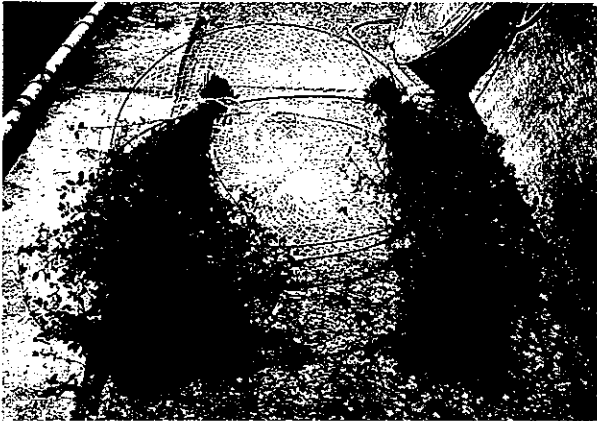


写真 イカ籠の形状 (上：半球型・下：円筒型)

円筒型籠の形状は直径0.9～1.6m、高さ0.4～0.6mの缶詰型で地域により大きさが異なっている。側面にはコウイカを籠の中に導くため、直径約20cm程度の漏斗状の入口がある。この漏斗部の長さもイカ籠の直径の1/3～2/3程度と地域による相違がみられた。

骨組みの材質は、イカ籠の底面と側面が鉄、上面が竹であり、これはイカ籠を海に投入して海底に着地するまでに軽い竹枠が上面なるように考慮したものである。なお、鉄枠が普及するまでは、上・底面とも竹枠で作製し、底面に石の錘を数個装着していた。

鉄枠は亜鉛どぶ漬け、ペンキ塗装、テープで巻く等の種々の防錆対策がなされている。上面の竹は主に孟宗竹を、幅3～5cmにして利用しているが、円形にするためには、ゆがみが生じやすく、ある程度の技術が必要とされる。なお、漁期終了後には、鉄枠、竹枠、網はそれぞれ解体しているのが一般的である。

また、側面と底面の鉄枠が固定されていると収納等にかさばるため、側面の鉄枠が内側に折り畳み式になるもの、また、側面は鉄枠の代わりに、竹を使用することで、簡単に立体状から平面状にできるようにしたものもみられた。

枠を覆う網については、スパンナイロン(商品名)、クレモナ糸(商品名)、ポリエチレン糸(商品名)等が用いられている。スパンナイロン、クレモナ糸は汚れやすく、ポリエチレン糸は汚れにくい反面、切れやすい等、材質には一長一短がある。目合いは6～8節で共通しており、網の色は黒、赤褐色系が多く、これらの色をコウイカが好むという話も聞かれた。鹿児島県でもこれらの色が多用されている<sup>3)</sup>が、コウイカは色盲と考えられている<sup>4)</sup>ことから他の要因が影響していることが考えられる。

鉄枠以外の竹枠、網等は、漁業者自ら作製するところが多く、個人個人で様々な工夫がなされており、例えば底面の枠と網については、網の擦れを防ぐため海底面と直接触れないように、底面の枠と網は直径1cm程度の紐で巻かれている。

一方、半球型籠の枠は鉄製であるが、かさばらないように折り畳むことができるものが多い。大きさは直径0.9～1.2mで、側面に直径約20cm程度の漏斗状の穴があり、この長さはイカ籠の直径の1/2より若干短い程度である。仮屋漁協ではイカ籠が小型化しているだけでなく、鉄枠等が細く軽量化されているなど神集島支所とは多少異なっている。半球型は円筒型と比較すると小型であり、取り扱い易くなっており、作業時の労力の軽減が利点と

いえる。

## 2) 産卵基質の形状

イカ籠は、コウイカが沿岸に来遊して海藻や沈木等に産卵する習性を利用する漁法で、柴等の産卵基質を取り付けることが一般的である<sup>5)</sup>。当海域においては、イカ籠の入口左右に一对の産卵基質を付けている。産卵基質の素材はイヌツゲがほとんどで、当初は漁業者が伐採していたが、近年イヌツゲの減少に伴い、専門業者から購入することが多くなっている。専門業者はイヌツゲを伐採するだけでなく、安定供給するために、自家栽培を行っており、産卵基質として使用するためには植栽後3~4年以上を要するようである。

イヌツゲのイカ籠への取り付け方は、通常、十数本の枝葉を紐で2~3ヶ所堅く縛り、イカ籠からはみ出ないように長さを揃え、イカ籠入口の両側にハの字型に取り付ける。この場合、枝を上にするか、葉を上にするかは個人により異なっているが、前者のパターンが多い。また、イヌツゲは入手後直ちにに取り付けた方が良く、葉が落ち始めると、卵の付着が悪いようである。

イヌツゲの他には他のツゲ類、カシ類、ツツジ類、サツキ等も利用されている。漁業者の経験によると、葉持ちが良いこと、葉が小さいこと、イヌツゲ固有の臭いがコウイカを誘引すること等の理由によりイヌツゲが最も優れているとのことであった。

## 3. 漁獲状況

### 1) コウイカ

イカ籠漁は主に2~4月に行われるが、盛期は2~3月頃で、4月になると漁獲量が減少する<sup>1)</sup>ため、漁期の終了を待たずに早めに切り上げる漁業者もみられる。

1籠当たりの漁獲数は10個体も入れれば多い方であるが、30個体程度入る事例もあり、これが最大漁獲数と推定される。漁獲サイズについては、2~3月は大型個体が漁獲されるが、4月以降になると次第に小型化する<sup>1)</sup>。

漁獲後は、鮮度保持のために殺しを入れているが、殺しは通常両眼の間あるいは口の部分に竹べらまたは細身の包丁を突き刺して行っている。

当海域では産卵基質であるイヌツゲに産卵することが、イカ籠にコウイカが入る前提条件といわれている。ただし、付着卵数が多いほどコウイカの漁獲量が多いとは限らないようである。また、イヌツゲが枯れても卵が付着していれば、コウイカは籠に入るが、イヌツゲでなくイカ籠に直接卵を産みつけることもあり、このときはイカ籠の中にコウイカが入ってこない傾向がみられる。

### 2) その他の魚介類

主な漁獲物はコウイカであり、他の魚介類は少ない。その中でも比較的多いのは、マダコ、カワハギで、次いでメバル、ケンサキイカ、ペラ類、カサゴ、オニオコゼ、カレイ類等が漁獲される。

アオリイカの卵がイカ籠のイヌツゲに産みつけられることもあるが、イカ籠でアオリイカが漁獲された事例はないようである。

## 4. 付着卵の活用

イカ籠の産卵基質であるイヌツゲ等に付着した卵は、海中である程度ふ化していると考えられるので、イカ籠漁業は漁獲する一方で資源の増大に寄与している特殊な漁業といえる。漁期終了後も卵が付着したイヌツゲ等は海底に戻していることが多く、資源の増大に貢献していると考えられるが、その場所については一定ではないこともあり、イヌツゲが網に絡まるなど他漁業の操業に支障をきたす例もしばしばみられている。

## 要 約

1. 佐賀県玄海地区のイカ籠漁業の主な操業期間は2~4月、操業場所は水深10~40m程度の砂地である。
2. イカ籠の形状は円筒型と半球型との2つに大別され、一般に円筒型が主である。半球型は円筒型に比べ小型で、取り扱いやすく操業時の労力は軽減されるものの、1籠当たりの漁獲個数は少ない。
3. イカ籠の産卵基質として主にイヌツゲが用いられており、これに産卵することがイカ籠にコウイカが入る前提条件となっている。

## 文 献

- 1) 野田進治・鷲尾真佐人・柴山雅洋 2003: 資源管理型漁業推進総合対策事業, 平成13年度佐賀県玄海水産振興センター業務報告, 38-53.
- 2) 綿貫尚彦 1998: コウイカかご漁具の漁獲機構に関する行動生理学的研究, 鹿児島大学博士論文. 1-125.
- 3) 川村軍蔵 1990: コウイカと籠. 魚類の生態からみた漁法の検討30. 水産の研究, 9(1) 33-36.
- 4) 原 富之 1975: 頭足類網膜の感光性色素, 「光感覚」, 学会出版センター, 東京, 55-88.
- 5) 竹内正一 1981: 籠の漁具構造・漁法, 「籠漁業」, 日本水産学会編, 恒星社厚生閣, 東京, 22-36.